鄭上海子全集

第Ⅱ期

第十七卷 一二

岩波書店

野上彌生子全集
第II期 第十七巻―二
第二十四回配本
（全二十六巻）

一九九〇年四月二七日　発行

著者　野上彌生子（のがみやえこ）
発行者　緑川亨
発行所　株式会社　岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
電話 〇三-二六五-四一一一
印刷・精興社　製本・牧製本

定価四七〇〇円
（本体四五六三円）

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 野上素一 1990　Printed in Japan
ISBN 4-00-091178-3

目次

昭和四十八年……一
昭和四十九年……二〇二
昭和五十年……三七九
昭和五十一年……五四六
後記……七二

一九七三年

一月一日 月 晴

朝ちようど七時まへに目覚めたので、ベットでニュースをきいたが、初詣で明治神宮が40万　午後のニュースではいづれも百万の百五十万のといふ　川崎大師が60万浅草の観音さん30万といつた参拝者の数があげられた。おみくじやはま矢の売れ行きもすさまじい。民衆のかうした心理が、いつ、どんな変化をするだらう

　これは正しい意味では宗教的なものではなく、いはゆるエコノミカル・アニマルの精力発散のレジアの方法のひとつと称してよいのだから。

M・M、燿三、三枝子とともにおせちを食べたり、テレビでサッカーをのぞいたりする。サッカーのルールをはじめて燿三から教はる。これらの選手らの逞しいエネルギについての話から、先般南米の山中で墜落した飛行機で三十日あまりも生存した乗客はラグビーのチームの若者らで、死者の肉を食料にしてゐた事をインターヴュウで語つたことなどが話題になる。戦場での敗残兵らの間には珍しくなかつた事だが、飛行機の墜落にからまるエピソードとしてははじめての事であらうし、またそれがいとも自然なプロセスとされるのも、極限の条件下での人間のすがたの一つを示すわけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

で、海神丸などはなんでもない物語といへるだらう。メデューサ号の遭難、それをドラクロワが描いた有名な画のことなど燿三はこんな事をよく知つてゐる。
ニュー・ヨークの荻田へよせがきでオレンジの御礼をかく。
夜、菊枝さんがでる「元旦の日」〔客〕なるテレビ映画の九時からなのをとくべつに見てゐた間に、赤軍派の森が拘置所で首つり自殺をした速報があつた。彼らも時代の犠牲者とおもふだけになにか哀れでならない。

一月二日　火　晴

実ちゃんが朗子をつれて出掛けて来た。それに謙一、尚代、三千子、晃さんも顔を見せ、お正月らしい集まりになる。北京料理のおせちその他で豊富なホスピタリティも果されてよい都合で〔以下空白〕
茂吉郎は台さんのところのパーティ。
生田の明子のところへ廻る実ちゃん、朗子を門口まで見送つたついでに原さんところへの年賀をすまし、それから燿三のところへも、研究室の〔粟谷〕君が見えてゐた。

一月三日　水　晴

昨日も今日も青空、雪の富士山が都心からあざやかに仰がれるとテレビが報ずるほどの美しい晴、
それにちつとも寒さが感じられ〔ない〕ほどの和やかなお正月日和
それでも昨日のがや〳〵で朝ベッドにずつとゐ度いほどの疲れを感じたが、おきてしまへば動くの

にはたいして苦痛はない。それでも午後はずつと寐室で過す。テレビで「入唐求法巡礼紀行」の話をきいて心打たれる。円仁の求法の精神の深さ強さもさる事ながら長安の四年あまりの滞在に当時の中国の歴史の変化、生活のデテールに記された記録は、ライシャワーが世界の三大紀行と推賞すると語られるほど独自なものらしい。

一月四日　木　晴

仕事にもどる。といつても直しである。

一月五日　金　晴夜ぱら〳〵雨

同じく直しの仕事。夕方近く山崎功氏御年賀に見え、ホールでしばらく話す。ルネッサン〔ス〕時代のフィレンツェ、ヴェネチアの生産活動を書いてゐるとのこと。ルネッサンスといへば絵画、彫刻を核としての文化的活動が主としてとりあげられてゐる事故、彼の仕事はユニークなものになるだらう。「昔がたり」がマンテルピースの上に並べてあつたので、あげる事になつた。マロン・グラッセの御返礼としてそばを添えて。

一月六日　土　晴夜雪

「朝日」のために執筆した「お正月さま」今日の朝刊にのる。早速反応あり社にデンワがかゝつて来たと浜川氏より報告、うちにも林徳三なる人の身よりとしてデンワが来た。知らない人なのでそのつもりで答へ、訪問は春あたたかにでもなつて――と断つたが、あとから平清水の大塚の分家に養子に行き、とびだして浅草で世帯をもつてゐた向店の小母さんの兄の遺族で、染井時代には出入

りしてゐた家に同居してゐた人の名まへであるのを思ひだした。
午後牧瀬夫妻つれだつて見える。久しぶりに昔話いろ〳〵。平塚らいてうが昭和八年の婦人公論で共産主義をさかんに攻撃した一文の事をきく。それには私も書き、反対の立ち場に立つてなにか云つてゐるとの事ながら記臆にない。しかし平塚さんが櫛田さんらによつて社会主義的平和論者の代表とされたのは、まことに一種の喜劇であつた事には相違ない。

一月七日　日　小雨　寒の入

朝庭が小白くなつてゐたので、夜来の雨が初雪になつたのを知る。しかしそれもおひ〔る〕ごろまでには跡方なくとけたほどのもの。お正月から着てゐた茶縞のウールの袷を綿入れに変へる。
おひるごろ燿三がちよつと。アメリカでネーダーなどにより問題にされてゐる原〔子〕力発電所の安全性についての疑ひについて訊く。大地震などの為、現在の防備設備が破かいすれば……とのことで、確率性はたしかめやうはないが、その場合には放射線の心配は十分あると彼もいふ。マロン・グラッセと乾柿をもたせてやる。

一月八日　月　晴

一、二日まへ三枝さんがお年賀に見えた御返礼に午前ちよつと訪問。くし柿は彼女からのお年玉であつたので、ツクダニと虎屋の推古返礼。昨年のブルガリア旅行の時買つて来たといふ赤い手をり卓掛がかゝつてゐたのが、岩上さんに頂いた小卓ぎれと色から横じまのデザインからすつかり同じものであつた。包み紙が日本のものなどとは較べようもない粗末さから、現在の日本の不必要なむ

だ使ひを話題にしたりした。彼女が知人の劇作家に与へた宗麟が、そのお仲間に大評判になつてゐることなども。

中村光夫氏が「昔がたり」の御礼のハガキを下すつたので、返事を書き、一昨年彼の全集のために書いて未発表のままになつてゐる小文の事をもしらせた。

一月九日　火　晴

原稿の直しどうにかすんだ。しかし三月発表の「クリスマス」はあとの「画学生」のまへの部分を加へたものにし、「画学生」は題名を「夢ふたたび」としたらと思ひついてゐる。

夜素一来る

一月十日　水　晴

午後芝木好子さん来訪。女流文学賞の御礼の意味らしい。突然であつたが横山さんの来てゐる日でそれほどまごつかず、ホールの薪ストーヴのまへで一時間あまり話す。宇野さんの事が共通の智識でよい話題になる。虎屋ようかんを頂いた。三越のオーデ・コロン返礼。――こんなふゐな必要もあらうかと買つておいたのが役だつたわけ。芝木さんも中年婦人らしいおとろへが見えてゐる。

一月十一日　木　晴

昨朝から朝は素一とお抹茶、今日は外出のまま帰つてしまふ由で、鈴木さんへと宗麟一本もつて行く。

米とベトナムのパリ会談がふたたびはじまつてゐるが、前途は相変らず不明らしい。タイの米基地

からベトナム爆撃に出かけるB52の機長の大尉が出撃を拒否した報がつたはる。軍法会議にかけるかどうかゞ問題になつてゐるとのこと。米の一般の傾向からかうした軍人の行動は中々の勇気と決心を要するものであらう。

一月十二日　金　曇

新宿のデパートで明の十三陵の模型展があるとて、M・Mつれだつて出かける。

私は昨日から「森」のあたらしい部分を書きはじめる。カッテージの校舎の煙突をおもひついたのがよいヒントになり、存外スムースに行きさうなのでうれしい。

三十六の議席を衆議院でしめた共産党が、開会式に天皇が来て「おことば」なるものを述べるのは憲法違反だから、今度の議会から中止するやうにと中村議長に申入れた。かしかにこれはもとの帝国議会の延長の形式であるには違ひない。しかしこれが議会ですべての賛成をうるにはまだ当分時間がかゝるだらう。

夜南ばん文化のかれこれを教養番組できいた間に、リスボンの近くのエゴール?に少年使節の受けた歓待への礼として秀吉から贈られたといふ屏風の下張りに、臼杵のコレジオの学生たちがきいてゐた講義のメモの間に先生の顔を書いてゐるのが場面に現はれておもしろかつた。突きでた大きな鼻、もじゃ〳〵の髪毛、ひげ、法隆寺の大工たちのいたづら書きに通ずるものであらう。こんな話をしてくれるのは村上直次郎氏の弟子と名乗る野村さん、権威ある本格的な研究者らしい。ヴァチカンの大友宗麟の手紙も、花押などの考証から宗麟自らが書いたのではなくワリニヤーニなどの政

治的工作であつたらしい話をしてゐたのも初耳であつた。
小宮夫人より米寿のおいはひとて坐ぶとんとどく。
一月十四日(二二) 土 晴
執筆、順当につゞく。
渡辺外喜二郎(三三)氏よりカンナなる小雑誌とどく。
中さんの手紙がでてゐる。
一月十三日 土
一月十四日 日 晴
おうたさん来る。足袋カヴァや菓子のほか、おでんを持つて来たので、それで夕飯を伴にする。三千円のほかカイボシその他いろ〳〵もたせてやる。
Mの方は岩田一家に謙、尚代集まつて、成城のシナ料理屋へ出掛ける。誘はれたけれど、おうたさんも来てゐるしで同行せず。裕吉さんには虎屋のようかん、謙たちには昨秋のお祝ひに臼杵から貰つた二枚つゞきの純毛のケットを与へる。
一月十五日 月 雨、小雪
一月十六日 火 晴
一月十七日 水 曇夕方小雨ぱら〳〵
日記の怠りは執筆の為である。新しい部分存外にうまく筆がおろせたのが、ずつとスムーズに進行。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

半ピラ二枚ながらすら〳〵と運ぶこんな調子が、今後つゞいてくれたらと念じられる。

午後小島さん。ホールの暖炉の焚き火のまへで三時過ぎまで。二月号発表のため「クリスマス」を渡す。プレゼントの方は暮れにあげないままになつてゐたわけで、オーデ・コロンとトワイニングの壺入りを一つ呈上。彼女が去つた後入浴までにベッドで休んでゐたところへ玄関のベルがかすかに鳴つた。こんな時刻に誰が来たのか？と台所の横山さんがでればよいわけと横着をしてゐると、台所口へ廻つたと見え、とんとん登つて来た。地所の事でうん〳〵といふ。仕方なくをりて行くと玄関に小柄なズボンの中年女が立つてゐた。地主の鈴木が病気で入院する事、土地についての事務を委託されたので、今日も挨拶だけに来たとの口上、レーモンド不動産からなのである。終戦以来、この会社のやり口は耳にしてゐたので、これは面倒な事になりかねないと感じられた。とにかく鈴木の方からはなにも通知がないこと、且つ今年分の地代は支払ひずみである事を立ち話で伝へ、それは承知だとの事をいつて帰つた。二十年の借地契約は昨年あらたにされてゐ〔る〕のだから、法律的には不安はないわけだが、相手がレーモンドに変つたとすれば従来のやうにはいかない事が生ずる心配もあり、とにかくそれに供へる用意は必要であらう等、等考へてゐたところへ丁度茂吉郎があらはれる。

これは先日実ちやんが朗子と訪ねて来た時、この土地の将来について話し、もう買入れといつた事にでもなれば、親類で分けて——といつたやうな話をしたのに就いて、上京中の道郎の意見として、そんなまとまつた金は臼杵の家はちよつとむづかしい上、収得税（ママ）など支出が添うていけない。借地

権さへ握つてゐれば、それがもつとも確実だからといひ、私にその説明に来てもよい、うんうんの電話を伊都子が伝へて来た、とそれを取りつぎに来た。
私とてもレイモンドの来たのを伝へたかつたところで、とにかく水品氏に一度相談しようといふ事に決定、川崎の自宅にデンワしたが、通ぜず、お留守らしかつた。
世の中といふもの、どんな生き方をしてゐても、なにかふゐの出来事なるものを免かれないとつくづく思はれた。

一月十八日　木　小雨

昨日は小島さんの相手をしたのと、レイモンドのハプニングがあつたりで気疲れがしたらしく今朝は七時すぎに目覚めたあともそのままベッドを出ないでゐたら、九時すぎまで眠つてしまつた。それで洗顔にをりた際、昨夜通じなかつた水品さんへデンワする事を第一の仕事にしたら運が彼自ら現はれ、明日の午後来てくれる約束になつた。私が眠つたあとの事、またさし迫つて今年は千万から越すらしい所得の税のこと、いろ〳〵土地のこと以外にも彼に話しておき度い事が多いのだから、明日の会見はまことに好都合といふべきである。

一月十九日　金　曇

午後おそく水品さん来り、地所のこと、住友の預金のこと、素一の東京居住について建てる家のこと、すべての経済的な問題について談合、茂吉郎、正子四人にてうなぎの夕食。御礼ごころに「昔がたり」と御車代、ほかにカイボシも。

この会談によつて住友の定期預金の仮空名や無記名は結句役にはたたずに課税の対象になるから証券に更えておくべきこと。和辻夫人も彼のすすめでさうしたこと——多分哲郎氏の全集が岩波からでた時のことであらう。

また素一の家はレーモンドの世話に移る以前に鈴木から建築の許可をとつておくべきこと。つねは殆んどきかれない話であるのに、ひるま横山の事でいやなトラブルがあつた後でもあり、九時ごろまでつゞいた話のあとは疲れ果てゝしまつた。

一月二十日　土　晴

午後堀江さん来訪、三時から五時過ぎまで茶の間で。私と青鞜のかんけい、また野枝さん、平塚さんらとの関係を訊ねられるままに話した。平塚さんが晩年あんな形で代ゝ木の婦人たちにかつぎ上げられたこと、またそれによつてつくられたイメージと青鞜時代から戦争時代の彼女がいかに異なつたものであるかをも終に話さなければならなかつた。この喜劇的な変貌には堀江さんらもひそかに気づいてゐる仲間らしいが、しかし一般的な認識はまだ〳〵歪曲のままであり、牧瀬さんらが文献的に実証をはじめた程度のやうである。S・S上京。

一月二十一日　日　晴

S・Sは竜村氏の息子の結婚式のために上京したのみでなく、成城に臼井武夫氏が社長の会社が建ててゐるマンションの部屋のもんだいもあつたので、今日は式のまへにそれを見分に出掛けたりした。

おひるごろ燿三にデンワして呼びよせる。実ちやんが現在では珍物になつたヒメイチを十尾ばかり、その他漬物などまぜこぜに送つて来たのを昨日は茂吉郎のところへ分けたし、燿三のところへもと思ふとともに、彼が市河のおぢいさまの死後のビジネスの関係から一番心配してゐた住友預金の件についての水品氏の意見を知らせ度いと思つたからであつた。彼の大学の方のいろ〳〵な事情も委しくきく事ができた。

夕方岩田良吉夫妻とび込み。ゆりが丘に行く途中のより道とのこと。カイボシをもたせて帰す。

さて、気がかりになつてゐた鈴木地主との交渉が好都合に運んだことも書きつけておかなければならない。朝のうち素一、茂吉郎の兄弟がつれだつて鈴木邸を訪ね、素一の家を建てるについて承諾を求めたところかんたんにO・Kをえたのである。その代りまた地代の値上げを求められた。〔弥〕新之助老人は病床についたままとの事で、交渉相手は昨年から代理役をしてゐる息子さんの奥さんであつた由、これで四月から事務を引き受けといふレイモンドとの接触は避けられた。

一月二十二日　月　晴午後曇、

朝のうち静ちやん、正子とつれだつて成城のマンションの部屋を検分に出掛ける。

これは米国から荻田一家が帰つた場合にとの静ちやんの最初の心つもりからはじまつたが、都合では素一の家が出来るまで、そこへ仮寓してもとの意も加はつた。ところで昨日見に行つて、どうにか我慢される候補室としたものが、すでに契約ずみとの事判明。それ故そのつぎの候補になるものを探しかた〳〵、いはば見学に出かけたのである。私としては第二の候補〔空白〕が、九百八十

〔万〕円。支払ひ方法は銀行ローンで10年20年でよいとの条件をきき、借家をもつ意味で、住友の貯金をそれに廻しておいても、――との気持ちに次第になつたし、謙の将来の為にも、現在の間にあはせに住んでゐる二間の部屋にさへ二万五千を支払つてゐるのだから、マンションへだす金はそれに上積みするに過ぎない上、一つの財産にもなると考へたからである。

数分で行ける大きい方の踏みきりの手前に、外観も中ゝ好ましい恰好でそれは建つてゐた。目あての部屋のほかに他の室をいろ〳〵見て、ひそかに心配してゐたアパート・サイズなるちま〳〵とした狭さが全然感じられず、感じよく出来てゐる上、すべてで三十数室といふ手ごろな建物の全体の印象が気に入つたので、とにかく買ひいれを決心。大手町の本社にデンワ。しかし取締役の後藤不在であつたので、とりつぎの人に伝言を頼んだ。

午後水品氏より山一の証券についてデンワ。しかし彼のいふまま五百万かき集めて買ひ込むにも及ばないと考へるやうになつてゐたので300万だけと返事。木曜日の午後山一の男と同伴で来ることになつた

夕食後、素一の建てる家の設計を誰に頼むかの話から建畠惣也さんにデンワ。結局彼が奥さんの清子さん、弟の〔空白〕さんと十時近く来てくれ、十二時まで種ゝ談合、〔空白〕君にすべて依頼といふ事になり、二月いつぱいに図面を作り、着手は六月から。十一月に私が北軽から帰るころには竣工の予定。

十九日にS・S上京以来、私の毎日はすつかり変貌した次第で、もし山暮らしの間でなく、ふしん

騒ぎその他の彼らの生活にまき込まれるのは、心理的よりむしろ健康的に困るだらう。建畠君との事も私によつてかんたんにレンラクがつく始末で、すべてをよそ事に客観することはできないのだから。建畠君に語る静の設計けいかくを聞いてゐると、相変らず静ちやん式であるのも判明した。ところで臼井さんの成城のアパート購入の是非を惣也氏にただしたところ、専門家らしい批判で否定的であつた。まだ確約したわけではないので、この問題はすつかり取りやめとしよう。

一月二十三日　火　曇

S・S去る。

午後おもひがけなく小野長生さん来訪。

敏子さんの話、その他いろ〳〵。修道院も最近は掟が幾分ゆるやかになつたが、もとの面会は細い鉄格子越しで顔と顔のみ、全身のすがたを見度いとすこし歩いて頂戴と頼んだものとのこと。手器用な長生さんはスペイン系のカトリック教会メルセス友の会で奉仕的に刺繍を教へてゐる由で、例のカルメル修道院のケーキのほか、メルセスで拵へるといふ「ブラン・デ・ヒタノ」――ジプシの腕といふ腕のやうに長いカステラにクリームを詰めた珍しい菓子をおみあげに頂いた。林屋の御抹茶と乾菓子「茶の花」のほかに宗麟一本返礼。これはお父さんと同じ酒好きとの晋氏へ。臼杵の実が上京中の旨を伝へたので、二人は電話で臼杵話をした。

一月二十四日　水

一月二十五日　木　夕方より雨、夜風

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c